

TREND IN ALLERGY

アレルギーをめぐるトレンド

SHIMAUCHI Takatoshi

島内隆寿

浜松医科大学皮膚科学病院講師

TSLP (thymic stromal lymphopoietin)

TSLP (thymic stromal lymphopoietin)

上皮細胞から産生されるTSLPは、Th2環境への誘導に重要な役割を果たす。TSLPを標的としたアレルギー疾患治療は治験の段階へと進み、今後アトピー性皮膚炎への臨床応用が期待される。

胸腺間質性リンパ球新生因子(thymic stromal lymphopoietin; TSLP)は、表皮角化細胞、肺/腸管上皮細胞から病原性抗原刺激によって産生されるインターロイキン2(IL-2)ファミリーに属する炎症性サイトカインである。TSLPはアトピー性皮膚炎(atopic dermatitis; AD)のみならず、喘息、食物アレルギーとアレルギーマーチにも重要な役割を果たしていることが、近年明らかにされつつある。

ADでは表皮バリア機能が障害されており、外界からの病原性抗原が正常人より曝露されやすい状態と言える。こうしたアレルギー曝露は、表皮角化細胞からのTSLP発現を促進させていると考えられる。実際、AD患者の病変部皮膚において、TSLPは高発現されており、さらに血清TSLP濃度も正常人と比較して高いとされる^{1,2)}。表皮角化細胞から産生されたTSLPは、表皮ランゲルハンス細胞(Langerhans cell; LC)や樹状細胞(dendritic cell; DC)を活性化させ、ケモカインであるCCL17/TARC, CCL22/MDCの産生を促し、LC/DCのOX40リガンド(OX40 ligand; OX40L)を介するTh2誘導機構に重要な役割を果たしている³⁾。実際に、LCのみにTSLP受容体(TSLP receptor; TSLPR)を欠損させたマウスを用いた実験では、AD様皮膚炎が抑えられるとの報告がある⁴⁾(図)。一方、LC/DCのみならず、AD患者